

私の戦争体験（満州開拓団）——油絵とアルミアートの原点をさぐる

吉野 誠

はじめに

ヒロシマ・ナガサキと言えば、アメリカによって世界で初めて原子爆弾が落とされ、地獄と化した街ですね。

それでは長野県と言えば、ちょっと分かりにくいと思いますが、実は満州国（中国東北部）開拓団移民として日本で一番多くの人を送り込まれたのが長野県なのです。

広島県の満州開拓団人数（一般家庭の開拓団 7,641 人と満州開拓青少年義勇軍 4,414 人の合計）は、12,055 人で、この数字は全国で 7 番目です。

さて、1931（昭和 6）年 9 月 18 日、柳条湖事件・・・満州事変がおこり、翌年の 1932（昭和 7）年 3 月 1 日に日本政府と軍部（関東軍）が国策として傀儡国家「満州国」を建国しました。

実は昭和の初期におきた世界大恐慌の影響で、日本の農村は養蚕製糸業が全国的に打撃を受けます。その経済更生運動の一つとして満州国への開拓団が 1932（昭和 7）年から本格的に始まったと言われてはいますが、実はソ連（ロシア）に対する軍事的・国防的立場からすすめられたとも言われています。当時、日本の人口は増加しつつあったので、国民をへらすために満州国への移民を強行したという説もあります。日本全国では満州国への開拓団移民は約 27 万人です。

当時の満州鉄道設立委員長、児玉総参謀長が「・・・10 年以内に 50 万人の日本国民を満州に移住することができれば、如何にソ連（ロシア）が強がっても、そうやすやすと日本へ戦争をしかけることはできない・・・」と言ったということです。だから最初頃の開拓団は、武装移民団とも言われていました。

広島県の満州開拓団移民は 1934（昭和 9）年から始まっています。広島県からブラジル、アメリカ、ハワイ等への多く移民していますが、これらの移民は多民族と共存・共栄の精神ののっとなってすすめられました。

しかし、満州国への移民は、軍事力を背景とした、いわゆる日本政府の侵略の片棒をかつがされた移民だったのです。そして、1937（昭和 12）年に北京西南郊外で盧溝橋事件がおこり、日中戦争（支那事変）が始まりました。

同じ 1937 年から、満州開拓青少年義勇軍（青少年の移民）が始まり、当初は 15～20 歳未満の青少年だったのですが、1941（昭和 16）年からは 13～14 歳の少年も引っ張り出されました。

長野県に次いで広島県は教育県と言われて有名でした。青少年義勇軍は、しっかりと教育を受けた先生の熱心な指導や影響力によって満州へ送りこまれたのです。したがって広島県（4,414 人）の青少年義勇軍の人数は全国で長野県（4,604 人）に次いで二番目に多いのです。

純粹無垢で若々しい熱意をもって満州国と日本帝国の国策遂行のために行かされたのが満州開拓青少年義勇軍だったのです。

以上のようなことは、1988（平成元）年に広島県から（竹下虎之助県知事時代）予算補助を受けて出版された『広島県満州開拓史』に書かれていることを引用したものです。

ここで私の少年時代（学校生活）について少しふれておきます。

私が国民学校（小学校）2年生（1941<昭和16>年12月8日）の時、太平洋戦争が始まりました。先生が「毎日手拭い（タオル）を持って来なさい」の言葉。何をするのかと思って次の日持って行きました。

昼休憩の時「手拭いを持って校庭に集合！」と先生の声。「上半身は裸になって！」。その日は校庭に雪が積もっていました。「うわー、寒いのにやれんの一」と生徒の声。校長先生も裸になって朝礼台に上がり、生徒が整列するのを待っておられました。

「これから乾布摩擦をして体の皮膚を鍛えます。そうすると風邪なんか絶対に引きません。体を鍛え、大切に国を為すに戦争を為すに捧げるのです。それでは始めますよ」「一、二、三、四、五、六、七、八」と、校長先生の号令に合わせて生徒全員の声がひびき、手拭いで体をこすります。寒かった体も、だんだんと温かくなってきました。体も心もすべて国や戦争に捧げる為の教育だったのです。

図工の授業で、「若人よ、海へ空へ」という兵隊さんを募集するポスターや「米英撃滅」というアメリカ、イギリスをやっつけてしまえというポスターをかいたことも思い出します。

体育の授業では、アメリカのルーズベルト大統領や、イギリスのチャーチル首相の人形めがけて、竹やりで突きの練習をしました。

また、算数の授業の時に、分数の応用問題が解けずに困っていると、「吉野！こんな問題が解けんようじゃあアメリカの飛行機がうち落せるか！日本が戦争に負けたらもう、男はみんなキンタマを抜かれて殺されるんじゃぞ！女もみんな暴行されて殺されるんじゃ、わかったか！」私は絶対に戦争に勝つんだと勉強を頑張りました。学校のグラウンドを生徒みんなで掘り起こして畑にし、カボチャやサツマイモを植えたこともやり切れない思い出の一つです。

大陸への出発

さて、前置きが長くなりましたが、本論に入りたいと思います。

日本の戦況がだんだんと危うくなっていた1944（昭和19）年の3月に、私たちの家族7人は、満州国（中国東北部）に開拓団移民として渡って行くことになりました。私が11歳の時です。1944年といえば敗戦前の年です。そうして敗戦前に行くことになったのか、『広島県満州開拓史』を読んでみますと、それについては次のように書かれていました。

一、戦争遂行のため。

二、満州人や朝鮮人が工作している土地を安価、あるいは無償で接收して、日本国内の食糧不足を解決するため。

今になって思うと、とんでもないことでした。

当時、私たち家族は、比婆郡（庄原市）西城町中野に住んで貧乏しながら農業をしておりました。その当時、国や町役場の宣伝で「満州国へ新しい村を作りに行こう。満州に行けば大地主になって幸せな生活ができる」という言葉が耳に入ってきました。その宣伝にのせられて、父は行こうと決心したのです。母は反対でした。反対する母を父がキセル（きざみタバコを詰めて吸う用具）でなぐる姿を私は今でもはっきり覚えています。「幸せになれるんなら行ったほうがええ」と、私は父の思いに賛成でした。

第13次西城開拓団という名称で、当時の西城町長藤沢熊登氏自ら団長となり、251名の開拓団希望者を引き連れての移民でした。

備後西条駅前広場で盛大な壮行式をやって頂き、町民の皆さんに日の丸の小旗をふってもらい列車で出発しました。その日は寒い日でした。それはまるで戦地に向かう出征兵士のようで、子どもながら嬉しさと涙が出る思いでした。

下関港から朝鮮海峡を船で渡るのですが、アメリカの潜水艦にいつ攻撃されるかわからないので、日本の戦闘機に空から見守られ、びくびくしながらなんとか無事に釜山港に入港しました。そして汽車で朝鮮半島を北へ縦断して満州国に入り、目的地の吉林省徳恵県岔路口村へ到着したのは、西城町を出発してから1週間めでした。そこははるか彼方にうっすらと山らしい形が見える、すごい広大な平地でした。

当時の戦時下日本では、食糧不足で米のご飯なんか口に入らなかったのに、満州へ来て米のご飯は腹一杯食べられるし、肉も食べられ最高の生活でした。開拓団と言うからには、未開の荒れ野を開墾して耕地を作り農業することだと思ってやってきたのですが、そんな事はなくて、わずかなお金を渡して農地を接收し、満州人を追い出して居座ったのです。しかもその農地は肥沃度で、肥しなどやらなくても作物が実りました。これはまさに天国でした。

満州大陸という広大な地平線に、沈む夕日の眺めはすごかったです。狭苦しい日本（古里西城町）の山に沈む太陽よりはるかに大きく、しかも楕円形に見えました。それと、私たちが居住していたところは、松花江という河の上流地域で、この河で魚釣りを楽しみました。大きな魚が食いつき、引き上げるのにかなりの力が要り大変でした。

時々スッポンが釣れましたが、油断すると食いつかれるので怖かったです。子どもだった私たちには楽しいこともいろいろありましたが、満州人にとっては日本人は招かざる客だったので。

一、日本よい国、きよい国。

世界に一つの神の国。

二、日本よい国、強い国。

世界にかがやくえらい国。

この歌は、戦時中、国民学校（小学校）の二年生の時に習いました。こんな歌をうたいながら、他の民族を差別し、見下していたのです。今になって思うと、とんでもない教育を受けて洗脳されていたことに気付くのです。

1945（昭和20）年7月の初め、母は脊椎カリエスという病気に冒され新京（長春）の満鉄病院に入院して行きました。入院のため家を出発する時に、「誠、ちょっと来い」と苦しい息の下から、「の一誠や、満州に来るんじゃない。日本人は悪いことをしたの一。満州人を追いはろうて土地を奪ったんじゃ。戦争に負けたら満州人に仕返しをされるじゃろうの一」「何を言うんならお母さん！日本は悪いことなんかしてはおらん。日本は戦争に絶対に負けんと昨日も学校で先生が言うちゃったんじゃ」

母はそのまま馬車に乗せられて出発して行きました。私は母の言ったことが気になって仕方ありませんでした。その翌日、学校に行き母が言ったことを先生に話しました。先生は、私を職員室の中に入れて、声を低くし「吉野君、君は今言ったことを友達に言ってはいないだろうな」「はい先生、誰にも言ってません」「あんなことを言ったことが憲兵（軍隊の警察官）の耳に入ったら大変なことになるぞ！吉野君の家族は非国民じゃゆうて牢獄へぶちこまれるのじゃ。あの一、吉野君よ、日本は悪いことなんかしてないし、絶対に戦争に負けることはない。安心しなさい」。先生はそう言って私をたしなめました。

母は7月29日に病院で亡くなりました。51歳でした。

ここで一つ是非書いておきたいことがあります。私たちが住んでいた隣近所に、張さんという生活にあまり恵まれない満州人が住んでいました。張さんの家族はみんな気さくな人たちでした。めずらしい物があつたら、もらったり、さし上げたり、食事へさそったり、さそわれたり、正月や祭りには行ったり来たりのもろで親戚づきあいのような人間同士の交流を深めたものです。しかし、日本人と満州人の関係は、支配（加害者）と被支配（被害者）の何ものでもなかったのです。残念の一言です。

さて、母が他界して数日後、8月に入りました。そして8月6日広島へアメリカが原子爆弾を投下しました。続いて、8月9日には二発目の原爆が長崎市に・・・。

電気は勿論のことラジオも無かったので、私たちの耳に入ったのは数日後のこと。それも特殊兵器が使用されたということでした。

8月8日にはソ連（ロシア）軍がソ満国境を突破して満州国へ侵入してきました。頼みにしていた関東軍（満州国に配属されていた日本軍）は、私たち開拓団移民や満州で生活していた日本人を見捨てて、いち早く南下したと言われていています。要するに、守ってはくれませんでした。そういうこともすべて後になってわかったことです。

8月14日の午後、学校から帰る途中に、私たちは異様なことに気付きました。というのは、満州人数人が中腰で車座になり何かひそひそと小声で話し合っているのです。その満州人が私たちの方へ鋭い視線を向けるのです。何か不吉な予感がしました。後で分かったのですが、その時もう既に彼等は日本が戦争に負けるということを知っていたのだと思います。

その翌日、8月15日の早朝に、西城開拓団本部の馬に乗った若い職員さんが開拓団の各家庭に「持てるだけの荷物を持って、すぐに本部に集合してください」「早く！早く！」「どうしたんですか。何があったんですか」の質問には「本部に来られたら団長さんの方から説明します。早く！早く！」。職員さんはそう言い残して、次の家庭めざして馬を飛ばして去って行きました。

敗戦

1945（昭和20）年8月15日の午後、藤沢団長は本部に集合した団員に「皆さん、残念ながら日本は無条件降伏しました」と涙ながらに言われました。電気、ラジオは無いので、天皇の玉音放送を聞くことはなかったのですが、団員の皆は本気にしません。

「団長さん、それは嘘でしょうが、日本は戦争に絶対負けんいうて、わしらは皆信じてこれまで頑張ったんじゃ」と口々に泣き叫びました。

さあ事態は逆転しました。侵略者日本人に対して満州人（中国人）の仕返し襲撃です。西城開拓団本部は高い塀の中でしたが、多数の満州人に包囲され、土塀に穴をあけられたり、物を外から投げこまれるなど大変なことになりました。父親たちは昼夜24時間寝ることもなく、交替で守りと看視です。団員の何人かは猟銃で威嚇発砲して満州人の襲撃に対処しました。それはまるで戦争のようでした。

隣の開拓団との連絡をとるために、西城開拓団員の若い人が、満州人のすきをねらって門の扉を開けて、そーっと出かけていきました。運良く目的地まではたどり着いたのですが、帰って来る途中で満州人に襲撃されて体中を鎌でめった切りされ這いつくばいながら西城開拓団へ帰って来ました。その姿は血みどろでまともに見られませんでした。その人はわめき狂い、死にました。

そして、こんな事もありました。門の扉を、ついうっかり閉め忘れていたために、ピストルを持った満州人が入って来たのです。私はとっさに物陰にかくれてその様子を見ていました。生きた気持はしませんでした。見ているその前で、開拓団員の一人がピストルで撃ちました。弾はその人の腹のど真ん中を貫通したので、30 cmぐらい飛び上がって、パタッと倒れ、即死でした。

母が7月の初めに入院して行く時に言い残したことが、本当におきたのです。私の母は明治時代の生まれで、ろくに義務教育も受けていなかったと聞いています。

あの時、学校で私をたしなめた先生は、広島高等師範学校でしっかりと教育を受けた人でした。ろくに教育を受けていない母親に真実が見抜けて、最高学府まで行って教育を受けた先生

に真実が見抜けなかった。(実は、戦時中の教師は真実が見抜けても、国家権力の命令に従い真実を語ってはいけなかったのです。)

私が戦後、中学校の美術教師になって思ったことは、これからはものの真実を見抜き、それを実行する人間に育てることが教師の使命ではないかということでした。

さて、8月15日が過ぎてから、私たちのまわりは地獄となりました。逆に、日本の本国では一応戦争が終わり、平和への第一歩を踏み出したのです。

満州開拓団の現地には、満州人だけでなくソ連(ロシア)軍が毎日のようにやって来て、婦女暴行(レイプ)や物品の略奪です。

私の姉は、素早く頭の毛を丸坊主に刈って顔に消し炭をぬり、男性の服を着てあぐらをかいていたので、ソ連軍の暴行を受けませんでした。婦女暴行については、日本軍だってアジアの各地でやったのです。従軍慰安婦とか慰安所については戦後数十年たってから明らかにされました。今でも、沖縄においては数年前に米軍が小学生を暴行したという事件がおきています。近くの岩国の米軍もやっています。私の祖母は、ソ連軍がやって来た時に「あんたら、何をするんね、いいかげんにしんさいや!」と抵抗したために、銃で頭を殴られて、3日間わめき苦しみながら死にました。

結局、私たちの西城開拓団では74名が亡くなり、2名が行方不明で合計76名が帰国できませんでした。悲しくてやりきれません。亡くなられた人たちの白い骨の色は、今でも私の心にしみついているのです。

私の描く油絵には、白色や灰色が多く出て来ます。実は亡くなった人たちの骨の色なのです。それと私は、白い紙をやぶったり、しわにしたり、穴をあけて油絵のモチーフにしています。戦争中は人間やすべての尊い命がまるで紙をやぶって捨てるように粗末に扱われたのです。白い絵はその意味もあります。

繰り返しますが、敗戦後の満州開拓地では、満州人の逆襲、ソ連軍の暴行、病死、餓死、凍死などの地獄「死」しかありませんでした。その生き地獄の中で、大変な事件がおきました。

実は、全国の開拓団全体で約11,000人の自決者(自死)が出たことです。どうせ生きていてもつらい事ばかり、いっそのこと死んだ方が楽になれる・・・とあっての行為だったのでしょうか。

広島県の開拓団でも、(瑞穂村10人、第一広島村4人、第二広島村18人、第一世羅村3人、備南1人、第二世羅村51人、高田27人)合計114人が自決しています。この中で高田開拓団の自決は、私たち西城開拓団のごく近くでおきたのです。この事件は帰国してから知りました。幸いにも西城開拓団では一人の自決者も出ていません。

敗戦後の生き地獄の中で、夜になって月の輝く光を見てほっとし、希望をつなげました。満月の中に、別れた庄原市西条町美古登小学校の友だちの顔や、皆と一緒に登って遊んだ山のなつかしい風景が浮かんで見えました。涙で月がかすんで見えたのですが、それは希望の光でし

た。私が作るアルミアートのはじめは、あの生き地獄の中で生きる希望を持った月の光だったのです。

さて、ここでもう一つ話しておきたいことがあります。実は私、散歩の途中であちこちに無惨に捨てられたアルミの空き缶に出会います。そのアルミ缶を大切に拾って帰りそれを利用して、折り鶴や鳩を作り平和を祈っています。

それは敗戦後、見放され棄てられた私たち満州開拓民の地獄体験を忘れる事ができないからです。捨てられた物をほったらかしにしないで、いかにして命をよみがえらすか。これこそ敗戦後の地獄体験から学んだ貴重なことです。

帰国

1946（昭和 21）年 7 月に、やっと日本に帰れるという情報が入ってきました。普通だったら「うわー嬉しい」と小おどりするのに、「こんなにやせこけて弱った体で、ほんまに日本に帰れるかの一」と不安でした。

開拓団本部を出発する時、仲良くしていた満州人の張さん一家が「日本に帰るのですか、よかったですね。気をつけて帰りなさいよ」と見送ってくださいました。なんとやさしい張さんだったのでしょ。今でもなつかしく思います。

丁度あの頃、中国では毛沢東軍と蒋介石軍が内戦中でした。その流れ弾で殺された日本人もいると聞いています。

帰国といっても、スムーズには事は進みませんでした。先ず私たちは開拓団の本部を出発し数十kmも歩いて、松花江という満州鉄道の駅まで行かなくてははいけません。食料不足で皆体力はなく、大変でした。栄養不足でやせこけた 3 歳の弟を 17 歳の姉が背負って、頑張りました。途中で満州人に襲撃される危険性もあるので、昼間はコーリヤン（背の高い穀物）畝の中にかくれてじっとして、夜こっそりと歩いて移動するのです。3 日間ぐらいかかったでしょうか、西城開拓団皆で助け合いながらやっと松花江駅へたどりつきました。途中、新京（長春）や奉天（瀋陽）、錦縣（錦州）の収容施設に入って、伝染病保菌者検査を受けたり、引き揚げの順番を待つのです。新京～奉天～錦縣への移動は、無蓋貨車（屋根のない貨物列車）に乗せられました。屋根がないので雨が降ったら大変。大便、小便がしたくなったらやり切れなかったです。錦縣（錦州）の収容施設に入っていた時でした。あまりおなかが空いてやり切れなかったので、満州人の店でマントウ（肉まんじゅう）を数個盗みました。満州人に見つかって追っかけられたのですが、なんとか逃げて収容所へたどりつきました。そのマントウを家族皆で分け合って食べるつもりでしたが、父親が「このマントウはどこで手に入れたんじゃ。満州人の店で盗んだんじゃろうが。日本人はこれまでに満州人に悪いことをいっぱいしたことを誠も知っとろうが。これからはなんぼ腹がすいて死にそうになっても、人の物を絶対に盗んじゃ一いけん。このマントウは満州人に返してこい！」とひどく怒って私のほっぺたを殴りました。これは、きびしいしつけの一つだったと、今は亡き父親に感謝しております。

帰国途中にまだまだいろいろ大変なことがありましたが、コロ島という港から、アメリカの輸送船に乗せられて9月の中旬にやっと九州長崎県の佐世保港に入港しました。

久しぶりに目にした祖国の野山がなんと美しく見えたことでしょう。「この美しい大自然を大切にせにゃーいけんのー」、私は子ども心にそう思いました。

上陸すると、私たちは体中のシラミ（2～3mm大の白色の害虫）を退治するために、DDTという真っ白い粉末（殺虫剤を頭から足の指先までふりかけられました。それからさらに、健康診断を受け、伝染病の予防注射も接種されました。しかもやせ細った両腕にです。佐世保の収容所で久しぶりに麦と米の雑炊（野菜や大きなイリコがいっぱい入った）を食べ、生き返ったようでした。

私が13歳の時です。父親、姉、私、弟の5人が生き残り、2年ぶりに日本の土をふんだのです。日本でも乗り物は貨物列車でした。

広島駅で芸備線に乗り換える時、広島市内を見て、たった一発の爆弾でこんなにひどくやられたのかとびっくりしました。かなりのショックでした。

私は敗戦後、満州では全然勉強をしていなかったもので、西城小学校へ1学年下がって6年生に転入しました。

帰郷してやっと落ち着いた頃、西城町中野の八幡山に居を構えて山を切り開いて耕地を作り農業をしました。今度は本当の開墾です。かなり苦しい労働でした。

父が「誠、開墾は大変苦しい仕事じゃのう。このうおうに苦労して作った満州人の耕地を取り上げたんじゃけーのー。本当に悪いことをしたもんじゃ」と言いました。私は敗戦後、満州人が我々日本人を襲ったその気持ちがよく分かりました。八幡山の開拓作業は貴重な体験だったと思います。

1947（昭和22）年度から新制中学校が開校されました。戦後ですから、学校の施設、設備は最低でしたが、生徒の勉強をしようという気構えは最高でした。その中で忘れることができない授業を紹介します。

社会科の授業で文部省（現在の文部科学省）が発行した小型の教科書（副読本）「あたらしい憲法のはなし」を学習したことです。

その17ページの6、憲法第9条（戦争の放棄）を学習した時「うわーええもんが出来たのー。これからは日本は絶対に戦争はせんものじゃ。兵隊も、武器も持たんのじゃ。これでわしらは戦争へ引っ張り出されて死んでもえーし、よその国へ無理やり攻め込んで、ものを奪ったり、支配したり、殺したりすることも無いんじゃ」とクラスの皆で喜び合いました。特に私は、満州開拓団で、加害と被害両面の体験があるので、心に染み入る学習だったのだと思います。

社会科担当の T 先生は、「これからは国家間でいざこざがおきた時、武器に頼らずにおだやかに話し合いで解決していこうということなんじゃ。それを日本は世界で初めて憲法の中にとり入れたんじゃ。このすばらしい憲法を皆で守っていこうの一」と力説されました。私は今でもこの憲法第 9 条は世界の宝物だと思っています。

希望を胸に

中学校を卒業して農業の手伝いをしながら、西城郵便局で配達係として働き、家計を助けつつ庄原致高等学校の定時制（夜間部）に 4 年間通学しました。配達係は外での勤務なので、夏の暑い日、雨降り、特に冬は腰まで積もった大雪の中を朝暗いうちから郵便物を配達するなど、本当につらい仕事でした。でも夜学ではすばらしい先生やクラスメートの出会いがありました。

その中で、美術の Y 先生が「あの戦争中は命を投げ出すことが美しいとされたが、それは間違いだった。すべての命を大切に守り、その美しい命を画面や立体、音、文字で表現することが芸術なんだよ」と言われたことにどんなに感動したことでしょう。その御蔭さまで今の自分があるような気がします。改めて Y 先生に感謝したい気持ちでいっぱいです。

そして東京へ出て武蔵野美術大学に入学し、次のような「今を生きている現実の中で、逃避することなく、自分自身の内と外を凝視し、漢字、作品の中に何をどう表現するか」、大切なことを学びました。また、憲法学者星野安三郎先生の講義を受け、憲法に対する思いがさらに深まりました。美大に在学中は、実家からの仕送りは一切なく、二つのアルバイトで生活費と学費を稼ぎながら頑張って、やっと卒業しました。

そして、1957（昭和 32）年、廿日市市の七尾中学校を振り出しに、廿日市中学校、海田中学校に美術科の教師として勤務し、「美の根源は生命である」を美術教育の目標の一つとして授業実践しました。退職後は画家として生きていますが、今でも「美の根源は生命である」をつらぬき通しています。

ここで皆さんに是非とも伝えておきたいことがあります。私がかつて教師をしていた頃、〔教師が語りつぐ〕戦争体験という本を皆の力で出版しました。その体験集の中の、呉市 A 小学校 M 先生が執筆された文章を読んでドキッとしたことです。

それは、M 先生が久しぶりに会った同級生との対話の内容でした。同級生だった N 君は満州開拓青少年義勇軍に引っぱりだされ、敗戦後ぼろぼろになって日本へ帰って来た一人。「……ところで M 君よ、わしらをうまい話でだまして満州開拓青少年義勇軍へ送った H 校長が、今どうしているか知っとるか。あの校長は戦後の農地改革で不在地主にならんために、いち早く故郷に帰って、公職追放が解けるやいなや、町長選に立候補して町長になり、威張りくさっているそうじゃ。あいつの功名心のために、わしらは怖い思いをし、満州でどんなに辛い目にあったかわからん。命を落とした友達も多くなる。あいつが自分のやったことを少しでも反省する気持ちがあったら、のほほんとして町長のような指導的な立場には立てんはずじゃ。死んでいっ

た友達のことを思うと、あいつを八つ裂きにしてもあきたらんよ、ほんまに」と、ぶちまけたそうです。M先生は、N君が言ったことは、軍国主義教育を受けた側の言葉です。逆に軍国主義教育をすすめた側の良心的な教師からの反省の貴重な言葉を聞いたことがあります。その教師も戦争中、多くの教え子を戦場へ送り出した一人だったのです。

敗戦後、その教師は良心の呵責に耐えかねて、お花と線香を持って戦死した教え子の墓参りをしたのですが、「先生、私の息子を返してください！」と慟哭する母親から門前払いにあったとか。その先生は、「あの時代は国家権力の命令でやったのだから反対できませんでした。仕方なかったのです」とはどうしても言えなかったそうです。戦後、教職員の合言葉となった「教え子を戦場に送らない」は、こんなところから生まれた悲痛な叫びだったのです。

私は貧しい農家に生まれ育ち、苦しい戦争中を、そして戦後を力いっぱい生き抜いて来ました。その原動力は一体何だったのでしょうか。それは何よりも絵を描いたり物を作ることが好きでたまらなかった。そして、その道へ進む為にはどんな苦勞も苦勞と思わないでやりきったこと、その上すばらしい多くの人たちとの出会いと支えがあったからだと思っています。改めてその人たちに感謝します。

おわりに

さて、終わりにになりましたが、敗戦後、日本人（私も含めて）が異国の地で体験した生き地獄を忘れてはならないと同時に、日本が太平洋戦争中にアジア太平洋地域の多くの国々の人々を、それ以上の地獄へ追いやった、そのことに目を向け、決して忘れ去ってはいけません。今後絶対に戦争という愚かな行為をやってはいけません。

二度と開拓団という侵略の片棒をかつぐようなことをやってはならない、ということにつなげなくてはならないと思います。日本人が侵した過ちを素直に反省し、被害者に対して心の底から謝罪し補償すべきだと私は強く思います。

戦争に正当性はありません。戦争は悪です。悪そのものです。だから戦争は人間を悪魔に変えてしまうのです。

あの満州国（中国東北部）での敗戦後、両親や家族と死に別れ、取り残された日本人の幼子を中国人が育ててくれた、いわゆる日本人残留孤児。やりたいほうだいの悪いことをした憎いはずの日本人の子どもを、我が子以上に大切に育ててくれた中国人の心の広さ、暖かさに深く深く感謝し、私の話を終わります。